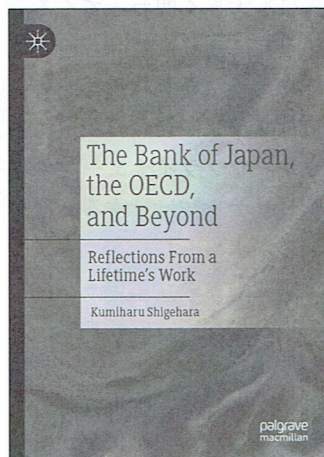


The Bank of Japan, the OECD, and Beyond

: Reflections from a lifetime's work

早稲田大学商学大学院教授 矢後 和彦



[著者] Kumiharu Shigehara (重原久美春)
元 OECD 副事務総長・チーフエコノミスト
[発行] Palgrave Macmillan, 2024 年 8 月刊
[判型] ハードカバー, 472 頁
[価格] 19,000 円程度

本書は、日本銀行金融研究所長・OECD 副事務総長等を歴任された著者・重原久美春氏が前著『日本銀行と OECD 実録と考察—内外経済の安定と発展を求めて—』（中央公論事業出版、2019 年）を大きく拡充して英語で書き下ろした論集である。

本書は全 4 部 22 章から成る。第 1 部「ブレトンウッズ体制下の内外均衡」（Internal and External Equilibrium under the Bretton Woods System）では、日本と西独における内外不均衡の調整、基軸通貨の役割など、ブレトンウッズ期の国際通貨問題と交錯した重原氏の視点が提示される。第 2 部「変動相場制下の日本の経

済政策運営と経常収支調整」（Japan's Economic Policy Management and Balance of Payments Adjustment under the Floating Exchange Rate System）では、1970 年代後半の日本経済と「機関車論」の台頭、1980 年代の米国高金利、プラザ・ルーブル合意と経常収支調整、等の論題をふりかえり、日本のバブル崩壊から 21 世紀初頭にいたる時期の金融政策を論じている。「アベノミクスと日本銀行の 2% インフレ・ターゲット達成の失敗」（Abenomics and the Bank of Japan's Failure in Achieving its 2 Per Cent Inflation Target）を取り上げた節を含む第 14 章はとりわけ注目に値する。第 3 部「経済政策運営の国内的・国際的フレームワーク」（Domestic and International Frameworks for Economic Policy Management）は欧州における金融政策の枠組み、インフレ・ターゲット、国際金融市場の規制と管理、多角的サーベイランスの役割と限界を論じている。第 4 部「グローバル経済が直面する新しい挑戦」（New Challenges for the Global Economy）では気候変動、福祉、高齢化など世界が直面する諸課題について重原氏が OECD 在任中とその後の言論活動を通じて発信した論考が編まれている。

上記の概要からもうかがえるように、本書は 1960 年代末から 21 世紀初頭にいたる経済史・経済政策史を OECD の視点から俯瞰した重要な証言である。重原氏の証言は OECD の立場から、時として大国の利害とも対峙する国際的・公共的な視点からなされている。ここに整然と提示された証言は、世界の経済的繁栄と平和的共存を希求するエピローグを含めて各界で十分に吟味されるにふさわしい。

(やご かずひこ)